

パリ通信 第123号

1、マスク解放

フランスは3月14日からマスク着用義務が解除される。例外として飛行機、列車、バス、地下鉄などの公共交通機関利用と病院、高齢者施設に限りマスク着用義務が続く。COVID 19 が始まって2年、マスク文化のないフランス人にとってマスク着用は受け入れ難い苦痛だった。裏表の見分け



方、付け方を知ら

ない人がほとんどで、マスク不足は中国に依存していた政策を見直す機会となった。早期ワクチン開発のおかげで、ようやくマスクから解放されるのは嬉しいがコロナ・ウイルスが消滅した訳ではない。この2週間でフランスの一日新規感染者数は7万を超え、増加傾向にある。オミクロン株変種BA2感染が数字を上げている。しかし、フラン

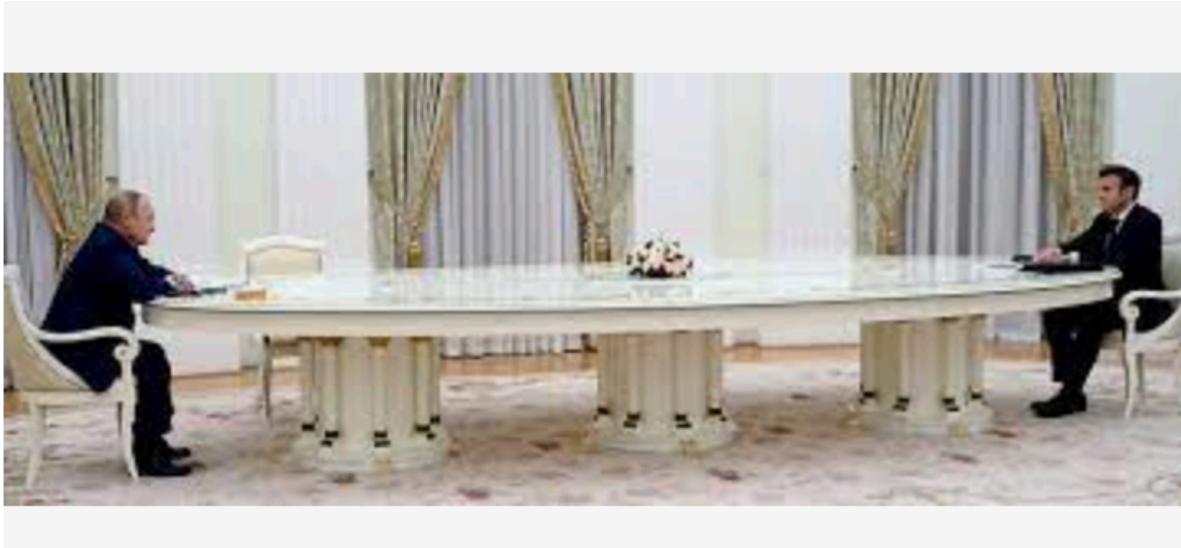
ス政府は集中治療を必要とするコロナ重症患者数が下がり続けていること、83%のワクチン接種率(3回接種終了)を以ってフランスの集団免疫ができたと判断する、この2つの理由でマスク着用義務を解いた。併せてワクチン証明パスの提示も病院以外は不要になった。

以前の生活に戻れる見通しがついたことになる。2020年3月15日に始まったフランスの都市封鎖、第5波までの病院逼迫、日常生活への計り知れない悪影響、心身共に世界中を蝕んだCOVID 19もインフルエンザと同じ扱いになろうとしている。本当に大丈夫なのか、もうしばらくはマスクを外したくないと思うのは日本人始めアジアのマスク文化の国々だけのようである。



2、しかし、コロナ禍を重視できなくなった本当の理由は、2月24日に始まったロシア軍ウクライナ侵攻である。

18日間続く爆撃で首都キエフがロシア軍に占領されるのも時間の問題になってきた。プーチン大統領は理由なき侵略をやめる気配がない。誰もプーチンを止められない。仲介に入る努力を続けているマクロン大統領だが、プーチンに翻弄されるばかりである。



マクロン大統領は2月7日クレムリンでプーチンと会い、ウクライナ侵攻しない約束を取り付けた。10mもあろうかと言う長い楕円形テーブルの端と端に座っての異様な会見。俺に近づくなと言わんばかりで、その映像はヨーロッパ中のニュースになった。

翌日2月8日にはウクライナのゼレンスキー大統領とも会見している。24日のロシア軍侵攻はまさかの出来事で、戦争勃発後も「人道回路」を交渉すべくマクロン大統領はプーチンと電話交渉を続けているが効果がない。

3月に入り、マクロン大統領は「欧州連合加盟国」(イギリスが脱退して現在27ヶ国)をヴェルサイユ宮殿に招き、「ロシア軍ウクライナ侵攻」対策を話し合う緊急会議「ヴェルサイユ・サミット」(3月10日と11日の2日間)を開いた。欧州連合は一丸となってウクライナを支援することでは合意しても、一刻を争うウクライナの戦火を消す決め手となる手立てがない。フランスはルーマニア国境に軍隊を送り、EU上空に戦闘機を配置しているが、ウクライナ国内の戦闘に参戦することはしない。

ヨーロッパ各国共に経済的にロシアを圧迫しているが時間がかかる。陸続きのヨーロッパにとってロシア軍ウクライナ侵攻は他人事ではない。「ヨーロッパの穀倉地帯」と言われるウクライナ、フランスではすでに小麦や飼料の価格が高騰している。ヨーロッパのガス供給はロシアに40%を依存しており、輸入禁止の強い経済報復を行うことができない。フランスではガソリン1リットルが2ユーロ(270円)を超えている。

フランスは4月10日(第1回投票)と24日(決戦投票)の「大統領選挙」を控えている。ウクライナ侵攻がなければ向こう5年間のフランス国内政策に関わる重要な時期だが、候補者たちは通常の選挙運動ができない。ウクライナ侵攻の火消しがヨーロッパ最優先の課題である。

雪が降り、電気も食料もなく、ロシア軍の爆撃に脅えるウクライナ市民、破壊される建造物、18歳から60歳までの男子は総動員で武器を取り、家を失い子供だけを持って国外に逃れる女性たち、21世紀の今日、絶対にあってはならない戦争が起こっていることに愕然とする。プーチンの愚行を一日も早く阻止して欲しい。



パリ・バスティーユオペラ座「ドン・ジョバンニ」の公演
カーテンコールで世界中の思いを代弁する「NO WAR」Tシャツ(右端)

撮影；古賀順子さん